OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	子育て中の男性との関わりによる学生の父親イメージの変容プロセス ： 子育て支援における父親になる「前」の父親支援という視点から
Author(s)	平野, 仁弥; 原口, 喜充; 小川, 将司
Citation	大阪大学教育学年報. 2018, 23, p. 79-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67863
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

子育て中の男性との関わりによる学生の父親イメージの変容プロセス
―子育て支援における父親になる「前」の父親支援という視点から―

平野仁弥　原口喜充　小川将司

＜要旨＞

本研究は，学生の父親イメージが，子育て中の男性と関わることでどのように変容したかを探索的に検討することを目的とし，自由記述式の質問紙調査を行った。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析の結果，以下のことが示された。①父親の作業の補助，②父親の作業中に子どもと遊ぶ，③活動する父親や父子の関わりを観察する，④自分が活動を楽しむなどの活動を通して，父親に関する＜活動での発見＞がなされ，元々あった＜幼少期の父親イメージ＞と擦り合わされる中で＜父親イメージの再構築＞が進んだ。この【父親イメージの変容】により，“父親との関係性の振り返り”と“次世代の父親への展望”とが相互にイメージされ【父親モデルの構築】がなされていた。これらの父親イメージの変容が父親になるための準備として重要な役割を果たし，父親になる前の段階から子育て中の男性と関わる機会を提供するという支援の在り方の有効性が示唆された。

Ⅰ．問題と目的

子育てに積極的に取り組む男性が「イクメン」と呼ばれるなど，男性の育児参加が社会的に注目されている。先行研究では父親の育児参加の促進がもたらす肯定的な影響が示されている。例えば，父親の育児参加は母親のメンタルヘルスの向上（大関ら 2014）や育児不安の軽減（神庭ら 2005）につながり，子どもの社会性の発達も促す（加藤ら 2002）。また，母親よりも変化の割合は小さいが，父親自身にとっても「親になる」ことは，「生き甲斐・存在感」「自己抑制」などの側面で成長があると指摘されている（柏木・若松 1994）。

このように，父親の育児参加は子ども・母親・父親自身の三者それぞれに対して肯定的な影響を及ぼすが，未だ育児の大半を母親が担っている状態である（国立社会保障・人口問題研究所 2008）。父親への子育て支援について、近年では様々な研究が進められつつある（小崎ら 2017）が、その必要性や注目度の高さに比して父親の育児参加は進んでいない。このような現状に対し，父親を対象とした子育て支援も実施されつつあるが，多くはイベント的で補助的な育児支援が典型的である（野津山ら 2011）。宮本・藤崎（2008）が指摘するように，現代の父親は、世話や社会化の担い手としての父親モデルが存在しない環境で育ってきており、父親となった今はそれをどう担えばいいのか戸惑っていると思われる。つまり、子育ての具体的なイメージが持てないだけであり、子育て支援ではより具体的な内容や手順を示していく必要がある（大元 2010）。

ここで母親について考えてみると，幼少時の実母との関わりを参考にして自身の母親像のイメージ作りを試みる（新道・和田 1990），実母をモデルとして母親役割の模倣を行う（Rubin 1967）など，母親は妊娠期から，主に自身の母親をモデルとして母親になる準備を進める。一方で，父親の場合は，先述の通り父親の育児参加が注目されるようになってからまだ日が浅く，自身の父親が育児をする父親のモデルになりにくい

ことが多い。田中・橋本（2007）によると，育児に積極的でない父親は家事を母親に任せきりだった自身の父親を手本としており，育児・家事の当事者であるという認識が弱い。また，潜在的には自身の父親を土台とした父親モデルを何らかの形で有しているとしても，妊娠・出産というプロセスを直接体験することができないために，自身の父親について想像を巡らせる機会を子どもが生まれる前に持つことは難しいと考えられる。確かに，男性も妻の出産に立ち会うという形で出産を経験することは可能であり，柏木（1998）が指摘するように，出産に立ち会った男性には子どもに対する擁護的な感情が芽生えるが，それは瞬間的な体験であり，じっくりと父親像について考える機会は母親と比べると持ちにくいと想定される。つまり，男性の育児参加を促進するためには，子どもが生まれる前に自身の父親モデルについて振り返る機会を提供するような支援が第一に求められると考えられる。

筆者らは，子育て支援を長年行ってきた臨床心理士が主体となり実施された父親支援として「子どものしあわせプロジェクト」（以下プロジェクトと略記する）に学生スタッフとして参加した。矢本ら（2015）によると，プロジェクトは地域で活動している既存の父親グループに対して募集を行い，集まった7グループを対象とした。目的は「父親による父親のための子育て支援活動」に対する後方支援であった。各グループで元々行っていた活動を生かし，父親グループ同士のつながりを広げて地域の父親による子育て支援を展開させることを狙いとした。また，次世代の父親育成という第二の目的もあり，学生自身の家族イメージ，父親イメージの広がりという効果も期待され，学生スタッフが募集された。具体的な支援内容は，父親イベント企画運営に関する学習会の開催，イベント支援者及び学生ボランティアの派遣，報告会・オフ会・シンポジウムなどの交流やHPによる情報発信の機会提供であった。父親グループの特徴と活動内容については，清水ら（2017）に報告されている。学生スタッフは各地の父親グループの活動に参加する中で，実際に子育て中の男性と関わる経験をすることができた。2年間の活動のうち，1年目を終えた時点での調査からは，学生の父親イメージがより肯定的なものへと変化したことが示唆された（大阪学生チーム 2015）。子育て中の男性と関わることは，まさに子育てをする父親というロールモデルを見ることでもあるため，プロジェクトを通して学生の中に潜在していた父親イメージに何らかの影響があったであろうことは想像に難くない。そこには，父親イメージの広がりと共に，自身が（女性の場合はパートナーが）父親になることへの心の揺れ動きなどがあったと推測される。本研究では，その変容の中身について，より詳細に検討することを目的とした。また，子育て支援の対象が母親に偏っている（金子 2015）という指摘もあり，父親を対象とした支援自体が少ない現状を考慮すると，実際の父親支援の活動から知見を産出していく必要があると考えられる。

そこで本研究では，プロジェクトに参加した学生に対し自由記述式の質問紙調査を実施し，学生が実際に子育て中の父親と関わることの影響を質的に分析し，探索的に検討することとした。それらを明らかにすることで，父親の育児参加を促進するための支援として，親になる以前の段階にある学生を対象とした支援の在り方も検討できると考えられる。

Ⅱ．方法

1．調査協力者

プロジェクトに学生スタッフとして参加した大学院生10名（平均年齢24±0.63歳，男性5名，女性5名）を対象とした（表1）。プロジェクトに参加した学生の多くは，臨床心理士養成課程に在籍する大学院生であり，本研究における調査協力者も全て臨床心理士養成課程に在籍する大学院生であった。なお，学生が関わった父親は，一般的な父親よりも子育てへの意識が高いと推測される。グループごとに目的や活動は様々

であるが，父親が積極的に子育てに参加することが，「地域の繋がりの中で虐待やDVの防止に繋がる」と考えていたグループもある。活動内容も，米作りや料理教室，家作りなどかなり労力の要る活動で，その熱心さが窺える。そのため，学生にとってはある程度モデルとなりやすい存在であったと考えられる。

表１　調査協力者の属性

	ID	年齢	性別	学年	チーム
1	A	24	男性	M2	a
2	B	24	男性	M2	a
3	C	24	男性	M2	b
4	D	23	男性	M1	b
5	E	24	女性	M2	c
6	F	23	女性	M1	d
7	G	24	女性	M2	d
8	H	25	男性	M2	c
9	I	25	女性	M2	a
10	J	24	女性	M2	b

2. 調査方法

調査は2015年２月に実施した。なお，プロジェクトは2013年４月から2015年３月の期間に実施された。

自由記述式の質問紙をE-Mailにて配布し，記入の上E-Mailでの返信を求めた。質問紙は年齢と活動チームを尋ねたフェイスシート及び，11項目の質問で構成した。質問項目は，活動内容やプロジェクトに参加した感想に加え，大阪学生チーム（2015）より学生が父親イメージを肯定的に変化させたことが示唆されたため，元々持っていた父親イメージとその変化についても尋ねた。質問紙は男性用と女性用の２種類を作成した。多くの質問は男女で共通しているが，将来自分が親になった場合を想定した２項目については，男性は主に将来の父親としての視点から，女性は将来の父親のパートナーという視点から記述を求めるように表現を調整した。具体的には，男性に対しては「自身が父親になることについて思うこと」，女性に対しては「自身が母親になった時，父親にはどういう形での育児参加を望むか」などと，性別ごとに質問項目を設定した。

3. 分析方法

各質問項目への自由記述をデータとし，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTAと略記する）を用いて分析を実施した。M-GTAは，社会的相互作用に関係し，人間行動の説明と予測に関わり，かつ限定された範囲内における説明力に優れた理論を生成する。また，M-GTAから生成される理論は，実践活用のためのものである。本研究は，子育て中の男性に関わる学生という限定された範囲における，学生と子育て中の男性との相互作用を対象としており，父親の子育て支援における実践活用を最終的な目標としているため，M-GTAを採用した。

データの分析は木下（2003，2007）を参照し，以下の手順で実施した。①データに密着した分析を進めるため分析テーマを「子育て中の男性に実際に関わる中での，学生の父親イメージの変容プロセス」とし，その体験の主体である分析焦点者を「子育て中の男性と関わった大学院生」とした。②分析テーマと分析焦点者に照らしてデータを読み込み，関連箇所を抽出した。③分析ワークシートの具体例欄に抽出箇所を記入し，具体例の解釈を文章化したものを定義，概念名に記入した。④他の部分・データに類似例がないか検討し，生成済みの概念の具体例を追加し，新たな概念生成も行った。概念生成の際には同時にそれと関係しそうな概念の可能性も考えることで，相互の関連を検討した。⑤ ②～④を繰り返しながらデータの分析を進め，具体例が豊富に出て来ない概念は有効でないと判断した。⑥概念としての完成度を上げ，解釈が恣意的になるのを防ぐため，類似例のチェックと並行して対極例の検討も行った。⑦生成した概念同士の関係を個々の概念ごとに検討し，抽象度を上げ下位カテゴリーを作成した。⑧複数の下位カテゴリーの関係からなるカテゴリーを生成し，カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ，結果図を作成した。

分析の最小単位である概念の生成プロセスについて１例を示す。以下は，学生Hが父親と子どもの関わりについて感じたことを記述した部分を一部抜粋したものである。

パパ自身や子どもの年は違えど，同じような境遇，同じような悩みを抱えているパパたちと話をしたり，活動に参加している中で子どもが泣き止み，他の子どもたちと遊んでいる様子を見るパパは，やはり親なんだなと感じた。自分自身がこの年齢になり父親との関わりを意識し始めたからこそそう思うのかもしれないが，自身がもう少し幼かった頃とは父親の子育てへの関わりに対する姿に関しては違って見えた。

ここでは下線部に注目し，分析ワークシートを立ち上げ，具体例欄に記入した。そして，定義づけを行い“父親との関係性の振り返り”という概念を生成した。さらにデータの読み込みを進め，同様に解釈できるデータを分析ワークシートの具体例欄に追加していった。並行して，この概念と関連する，もしくは対照的な概念を比較検討し，理論的メモに記録していった。理論的メモは，カテゴリーの生成やカテゴリー間のつながりを考慮する際に利用した。分析を行う上では性差についても検討されたが，全ての概念において男性と女性の両方の性別から具体例が抽出されたため，結果は男女を分けずにまとめた。

分析は恣意的にデータを解釈してしまう危険性を軽減するために，著者の３名全員が集まって行った。３名とも，M-GTAを用いた分析の経験が複数回ある。

M-GTAでは，データとの確認を継続的に行いつつ解釈を確定するため，分析プロセスの中に自動的に考察的な要素が含まれる。そこで，結果と考察を分けずに以下に記述する。

4. 倫理的配慮

調査にあたっては，研究の概要，研究協力の中断や辞退の自由，データは研究目的でのみ使用すること，公表の際は個人が特定されないよう細心の注意を払うことを説明した上で，調査協力者の自由意思のもと書面により研究協力の同意を得た。

Ⅲ．結果と考察

1. 活動内容

学生の活動は参加したチーム毎に様々だが，①父親の作業の補助，②父親が準備・話し合いをする際に子どもと遊ぶ，③活動する父親や父子の関わりを観察する，④自分が活動を楽しむの４点に集約できる。このように学生は，父親グループでの活動に一スタッフとして参加し，子育て中の父親たちと関わったと体験している。実際，学生は父親や父親グループに対し，何か特別な支援をしたわけではなくグループの一員として活動した。

また，プロジェクトの事業報告書（2015）によると，父親のプロジェクト参加の感想として，学生の存在は父親自身が頑張るきっかけになった，学生と子どもとの関わりを見て勉強になり刺激をもらった，ことなどが挙げられている。父親も学生からポジティブな影響を受け，父親らしさが引き立てられていたと考えらえる。これら学生と父親との相互作用があったことを踏まえ，以下に結果を示す。

2. 生成されたカテゴリー

M-GTAを用いた分析の結果，14個の概念，５個の下位カテゴリー，２個のカテゴリーが生成された（表２参照）。以下では，それぞれのカテゴリーとカテゴリー間の関係について，下位カテゴリーと概念を用いて説明する。なお，概念は“ ”，下位カテゴリーは< >，カテゴリーは【 】で示した。また，本文中に学生の語りを引用する際は「 」を使用した。

表2　生成されたカテゴリー・概念一覧

大カテゴリ	小カテゴリ	概念名	定義	具体例
父親イメージの変容	幼少期の父親イメージ	仕事に従事する父親	家庭を離れ、仕事に従事する父親の姿	*・父親は外で頑張って働いて（G）*
		家庭での父親	家庭を支える存在としての父親	*・あったかくて優しくて家族を見守る一家の大黒柱（I）*
		対人関係が苦手な父親	人とのつながりを作るのが苦手な父親	*・機会がない、同志がいないというだけで抵抗感（C）*
		休日に遊んでくれる父親	休みの日には遊びを通して子どもと関わる父親	*・子どものイベントがあれば参加したり、休日に遠くに遊びに連れて行ってくれる（F）*
		厳格な父親	権威的で厳格な父親	*・形容詞でいえば硬い、鋭い、厳しい、強い、冷たいといった権威的な男性的イメージを昔から持っていた（C）*
		子育てと切り離された父親	育児とは直接関わらない、もしくは関わりにくい存在である父親	*・家庭を思うことはあっても関わることはしない（B）*
	活動での発見	子どもとの関わりを楽しむ父親	積極的に子どもとの関わりを楽しむ父親	*・大人たちが楽しんでいるのでも必死になっているのでも、何か真剣にやっている場で、子どもたちが自由に遊んでいるという感じがあり、それで一つ十分なのではないかというように感じられました（F）*
		父親同士でつながる父親	パパ同士の交流の機会を持とうとする父親	*・お父さんがつながると、その家族が他の家族とつながる糸口になるのではと感じた（H）*
		「すごいところ」を見せる父親	体を張って、「すごいところ」を見せようとする父親	*・子どもの前で、何かすごいところを見せるという役割が大きかったようにも思います（E）*
	父親イメージの再構築	子育てに関わる親としての姿	親として、子どもに関わりたい気持ちを持つ父親の姿	*・子育てや地域イベントに積極的に参加したい気持ちを持ってらっしゃる方が多いと思いました（J）*
		父親と子育てのつながり	はっきりしていなかった父親と子育てのつながりが、活動を通しての体験から具体的なはっきりしたものに感じられること	*・家庭を思うという点において非常に抽象的な印象だったのが、具体的なイメージとして構成されたように感じる（B）*
		父親にしかできないこと	母親にはできないこと、父親にしかできないことがあることに気づくこと	*・母親にはできない、父親だからこそできることがあると強く感じました（D）*
父親モデルの構築		次世代の父親（母親）イメージへの展望	次世代の父親（あるいは母親）になるに向けての父親イメージへの展望	*・できるだけ子どもと関わる時間があればと思っています。そのために、子育てをすることを視野に入れた仕事探し、そして人生設計をする必要があるのかと思いました（A）*
		父親との関係性の振り返り	自身の父親との関係性を振り返ること	*・自分自身がこの年齢になり父親との関係性を意識し始めたからこそそう思うのかもしれないが、自身がもう少し幼かった頃とは父親の子育てへの関わりに対する姿に関しては違って見えた（C）*

1）ストーリーライン

まず全体のストーリーラインを概観すると，以下のようにまとめられた。元々もっていた＜幼少期の父親イメージ＞が，父親との関わりを通して父親に関する＜活動での発見＞がなされ，元々のイメージと擦り合わされる中で＜父親イメージの再構築＞が進んだ。この【父親イメージの変容】により，“父親との関係性の振り返り”と“次世代の父親への展望”とが相互にイメージされ【父親モデルの構築】がなされていった。また，上記のように得られたストーリーラインについて，カテゴリー・概念間の関係を可視化できるようにまとめたものを図1に示した。

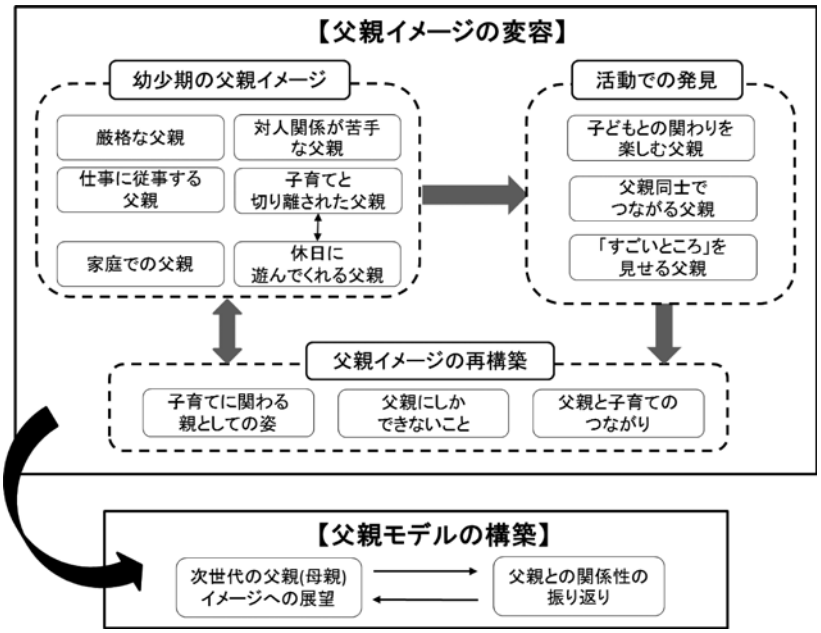

図 1　概念図

2）概念とカテゴリーの関係

次に，概念とカテゴリー，およびそれらの関係性について以下に記す。

【父親イメージの変容】

＜幼少期の父親イメージ＞

プロジェクトへの参加前，父親に対して，参加者の学生からは“休日に遊んでくれる父親”というイメージが抱かれていた。それは「*平日に殆ど関われないぶん，休日に特別なことをしてくれる*」（E）「*子どもと父親は遊びのイメージで繋がっている気がした*」（H）というように，休みの日には子どもと一緒に遊び，あるいはどこかへ連れて行ってくれるような「*特別なこと*」をしてくれる父親の姿を反映するものであった。また，家庭を支える存在としての“家庭での父親”というイメージもあった。普段の生活の中では，父親は「*あったかくて優しくて家庭を見守る一家の大黒柱*」（I）であると捉えられていた。その一方で，“仕事に従事する父親”のイメージも同時にあり，「*普段は仕事をしており，平日は関わる時間が少ない*」（J）と感じられているように，日中家庭を離れ仕事を頑張っている姿も，父親のイメージとして抱かれていた。仕事を頑張っている父親は，家事や育児を積極的に行う母親に対して直接育児には関わらない，もしくは関わりにくい存在であるという“子育てと切り離された父親”のイメージがあった。「*母親が家事育児を行い，遊ぶといっても子どもの遊びをそばでみている*」（A）「*家庭を思うことはあっても関わることはしない*」（B）というイメージのように，父親と子育てのつながりは消極的なものとして捉えられていた。また，「*硬い，鋭い，厳しい，強い，冷たいといった権威的な男性的イメージ*」（H）としての側面を表している“厳格な父親”や，「*コミュニケーションが苦手*」（F）で人とのつながりを持ちにくい“対人関係が苦手な父親”のイメージも持たれていた。これらの父親イメージについては，「*自身の父親は～*」（例えばC）という回答が散見されていることを踏まえ，＜幼少期の父親イメージ＞としてまとめられた。

＜活動での発見＞

こうしたイメージを持っていた学生は，次に実際に父親らと共にプロジェクトに参加し，そこで積極的に“子どもとの関わりを楽しむ父親”の姿を目の当たりにした。そこでは，「*お父さんが主体的に遊び，そして子どものために主体的に動く姿*」（A）「*お父さんの生き生きとした姿*」（I）や「*並行して（父親が）遊んでいるような印象*」（D）がみられ，子どもだけではなく父親自身も楽しみながら活動している姿があった。また，子どもたちを喜ばそうと積極的に活動する様子は，「*ある種のヒーローとしてのお父さんの姿*」（C）であった。「*子どもたちのために体を張って頑張っている姿はとても魅力的*」（F）であり，まさに“「すごいところ」を見せる父親”の姿であった。さらに，「*回数を重ねる中でだんだんとパパ同士の交流が多く見られ，一体感が出てきた*」（E）というように，“パパ同士でつながる父親”の姿も見られた。父親たちが「*つながる機会や場を作る*」（H）ことで，父親同士の「*笑顔の輪が広がっていく*」（H）のが実感された。また「*子ども同士の関わりを見て，自分の子どもについて新たに気付く*」（E）様子もあり，このようにして地域での父親への支援が広がっていくものであると推測された。以上のように，学生は子育てをする父親の実際の姿を見て＜活動での発見＞を得た。

＜父親イメージの再構築＞

＜活動での発見＞を通して，学生が持っていた＜幼少期の父親イメージ＞は変化していった。活動に意欲的に取り組む父親の姿は，家事や育児を積極的に行う母親に対し，子どもたちと「*関わりたい気持ちを強く持っていることが伺える*」（B），“子育てに関わる親としての姿”として学生の目に映った。「*父親の積極的な育児への参加というのはもはや当たり前のことであって，その中でどのように楽しんでやっていくか，どのようにして他のお父さんたちと繋がり，輪を広げていくか，といったことに関する創意工夫を考えておられる人が大勢いるという印象*」（H）を持っていた学生もいた。これまでは「*家庭を思うという点において非常に抽象的な印象*」（B）で判然としていなかった“父親と子育てのつながり”が，活動を通して「*具体的なイメージ*」（B）として感じられるようになり，「*子育ての場にお父さんが居る場面として非常にしっくりくる*」（D）感覚が出てきた。さらに，活動を通して，子育てにおいて「*お母さんにはできない，男の人だからこそできる*」（G）こと，男である“父親にしかできないこと”があるのではないかと気付くようになった。こうして＜父親イメージの再構築＞が行われ，【父親イメージの変容】へとつながっていった。

【父親モデルの構築】

これまでの父親イメージが変容するにつれ，学生は自身の“父親との関係性の振り返り”を行っていった。自分が育ってきた環境では「*お父さんが活躍できるイベントというものが無かった*」（J）と過去を振り返ったり，「*自分の父親像，現在の父親について改めて捉えなお*」（A）すような動きが学生に見られた。同時に，男性は「*子どもと一緒に，様々なことに楽しんで参加できる父親になりたい*」（H），女性は「*お父さんと横並びで子育てしていく事が大事なのかなと思います*」（G）など，“次世代の父親イメージへの展望”を持ち，次世代の親となる学生が自分自身へと思いを馳せていた。こうした過程を経て，学生一人一人の中で【父親モデルの構築】がなされていった。

Ⅳ．総合考察

本研究では，学生ボランティアが子育て中の男性と実際に関わることで，「父親イメージ」がどのように変容したのかを明らかにすることを目的とし，自由記述式の質問紙調査を行った。その結果，元々あった＜幼少期の父親イメージ＞が，父親に関する＜活動での発見＞を通して得られた新たな父親イメージと擦り

合わされる中で，＜父親イメージの再構築＞が進み，それにより“父親との関係性の振り返り”と“次世代の父親への展望”とが相互にイメージされ【父親モデルの構築】がなされていくことが明らかとなった。以下では，【父親イメージの変容】と，その過程で生じた【父親モデルの構築】，ならびにそれらの契機となった＜活動での発見＞の中身について，父親になる準備という観点から考察する。なお，調査協力者である学生には女性も含まれるため，女性の立場からは父親のパートナーとしての準備という観点で捉えた。

1．父親になる準備

1）偏ったイメージから柔軟なイメージへ

学生が元々持っていた父親イメージは，“子育てと切り離された父親”のイメージがある一方で，“休日に遊んでくれる父親”や，家庭を守る一家の大黒柱のような“家庭での父親”などのイメージもあり，必ずしも子育てと乖離したイメージであったとは言えない。しかし，これらのイメージは，ほとんどが幼少期に自身の父親と関わる中で形成されたもので，「*立場が弱い人と厳格で厳しい人の両極端なイメージ*」（H）という語りからも，それらは子ども目線からのみの，あくまで育てられる側の父親イメージであり，固定的で偏りのあるイメージであると考えられる。

それが，プロジェクトを通した父親とのふれ合いにより＜活動での発見＞がなされ，より具体的で柔軟なイメージへと変化していった。「*抽象的な印象だったのが具体的なイメージとして構成されたように感じる*」（B）という語りもあり，また，「*権威的な男性的イメージ*」であったのが「*温かい，柔らかいという女性的なイメージ*」も感じられるようになった（C）という語りからは，父親イメージに幅が出てきたこと，すなわちイメージに柔軟性が備わったことが示唆されている。また，これまでの父親イメージが変容するにつれ，学生は自身の“父親との関係性の振り返り”と同時に“次世代の父親イメージへの展望”の想像を行っていた。それらを通して育てる側である父親に移行しつつ，自身が父親になるイメージを膨らませた。それは，大人目線から父親イメージを捉え直す作業であり，父親になる準備として，育てる側の視点も獲得することに他ならない。

Samuels（1985）は，子どもとの関係において，父親の課題は「スペクトル（強い／弱い，去勢的／援助的 etc）の片方の端にとどめられるのを防ぎ，それによって他の立場が失われないようにすること」であると指摘している。要するに，父親は子どもとの関わりにおいて，権威的な強い在り方，あるいは援助的で柔らかい在り方などのどちらかの極に偏らないように，自身の在り方について考えを巡らせなければならない。例えば，子どもの内的な父親の地位が極端に高い場合，それは「誇張され偏った父親イメージを子どもに持たせ，現実の父親との満足な関係を妨げる原因となる」(Samuels 1985)。つまり，固定的で偏った父親イメージを子どもに持たせることは，健康な父子関係を損ねることになりかねない。それは，子どもにも父親にも，ひいては家族全体にとっても悪影響を及ぼし得る。これから父親になるであろう学生の父親イメージが固定的で偏ったものであると，自身の父親としての在り方を狭めることになってしまうと考えられる。このように考えると，学生の父親イメージが固定的で偏ったものから具体的で柔軟なものへと変容したことは，父親になる準備として非常に重要なことであると考えられる。

2）父親としての身体性

父親と母親を比較した際の決定的な差異は，父親は子どもを身籠ることができないという点である。母親は妊娠期から母親になる準備を進めるのに対し，妊娠・出産できない父親は子どもが生まれる前から親となる準備を進める機会が相対的に乏しい。母親は妊娠した時から，つわりや腹部の増大，胎動などを通して胎児をわが子として実感し母親準備を始める（小林 2002）。また，Stern et al.（1998）によると，妊娠中の母

親の身体的変化は「母性へ向けた心の準備を大いに助け」，出産を経験する中で「母親として生まれ変わる準備をほとんど完了してしまう」のである。この母親になるための準備を促す妊娠･出産というプロセスを，父親はそれ自体として経験することができない。というのも，母親の場合，その過程において劇的な身体的変化が生じ，それに伴い否が応にも心理的変化も生じるのである。父親にはそういった身体的変化は見られない。もちろん，父親も母親の妊娠・出産のプロセスを共にすることで疑似的に体験することはできるであろうが，その体験における身体の在り方は母親とは大きく異なる。河合（1995）は,「人間存在というものは，知的な面のみではなく，他にも多くの側面をもって」おり，その一つに「身体」があると述べ，身体を通じて「体験に結びつけて」知ることの重要性を指摘している。

身体を伴い体験することで，初めてそれが身になるのだと考えられる。妊娠・出産の過程において，母親はまさにそれを身体でもって体験し，母としての準備を進める。一方父親は，身体を通して父親となる体験をいかにして経験するのであろうか。本研究において，子育て中の男性とふれ合った学生は“父親にしかできないこと”があると感じるようになった。その一つに,「*身体を動かすお父さんならではの遊び*」（H）のように,子どもとの身体的遊びがあると考えられる。そこでは父親自身も童心に返り子どもと並行して遊び,「*身体を張って頑張っている姿*」（G）が想像される。これこそが，父親としての身体性の在り方ではないだろうか。

学生はそのような父親としての身体性，身体を通した子どもとの関わりを目にし，父親のモデルとして吸収した側面もあると考えられる。また，自分自身も身体を使って体験を共にしたことで父親としての疑似体験をし,「体験に結びつけて」自身が父親になる想像を巡らすことができたのかもしれない。これらは父親としてのアイデンティティ形成にもつながり得る,父親になる前の重要な準備として機能したと推測される。以上より，父親の育児参加を促すためには，父親になる準備を促す必要があり，そのためには父親になる前に子育て中の父親と関わるという形での支援が有効であることが示唆された。

3）父親の子どもらしさ

では，以上のような【父親イメージの変容】や【父親モデルの構築】がなされる契機となった，＜活動での発見＞はどのようなものであったのだろうか。注目したい点は，積極的に“子どもとの関わりを楽しむ父親”の姿を目の当たりにしたことである。“子育てと切り離された父親”，“仕事に従事する父親”イメージもあったことを踏まえると，自分自身も主体的に遊ぶ父親の姿は，学生の目には風変わりなものとして映り，今までの固定観念を覆すような体験であったと推測される。

安永（1980）の「中心気質」と呼ばれる概念を参照すると，大人も含め，誰しもが先天的に「子ども性（中心気質）」を有しているが，それはほとんど発達の過程で表面的には失われてゆき意識されなくなってゆく。しかし，どのような大人であろうと，多少なりとも中心気質的な要素は残されており，それをいかに活性化し意識化するかが重要であると老松（2014）は指摘している。また，Armstrong（1985）によると，繊細さや激しい感情などの「純真」な子どもの状態に立ち帰り，それと再びふれ合うことで,「埋もれていた癒しのエネルギーを甦らせることができる」。三浦ら（2016）はこれらの「子ども性」について，Jung派の文献を中心に先行研究から「子ども性」の４つの要素を抽出した。天真爛漫さや素直さ、無邪気さ、自己中心性などが含まれる「素」，現在への意識の集中とその衝動性を表す「今」、超越的なものと根源的なもの双方への親和性を表す「スピリチュアリティ」、創造的でも破壊的でもある遊びを求める性質を現す「プレイフルネス」である。そのような普段意識されにくい「子ども性」は,「*主体的に*」（A）「*童心に帰って*」（I）子どもと遊ぶ父親を目の当たりにし，ふれ合うことで，学生に幾分か体験されたと推測される。つまり，学生の父親イメージの変容には，はっきりと意識されていなかった自身の「子ども性」や「純真（な子ども）」

が活性化・意識化される契機が含まれていたと考えられる。「*存外自分が子どもが好きだということに気づけました*」（C）という言葉には，そのようなことが示唆されているのかもしれない。

それにより，“父親と子育てのつながり”がイメージされたのはもちろんのこと，より広く捉えると，父親が子どもと「*並行して遊んでいる*」（F）ように感じられたことからも，父親と子どもという存在自体の距離が縮まったと言えるかもしれない。体を張って頑張る父親が「*ある種のヒーロー*」（E）のような存在として捉えられていることからも，主役がどちらなのかわからなくなるような，大人である父親と子どもとの間に存在したイメージの中での乖離が緩和されるようなものとして学生に体験されたのではないだろうか。

また，抑圧された「子ども性」「純真（な子ども）」を活性化・意識化させることは，自己理解を深め，自己実現を図っていくことでもある。Armstrong（1985）は，最も重要な子育ての原理として，「あなたがすることより，あなたがどんな人間であるかということのほうが重要である」と述べている。「どんな人間であるか」という問いには，いかに自己理解を深め自己実現に取り組んでいるかという側面が多分に含まれていると考えられる。要するに，本プロジェクトにおいて，学生が体験したであろう「子ども性」「純真（な子ども）」の活性化・意識化は，自己理解という意味でも子育てにおける重要な課題であり，親になる前の内的な準備として非常に意味のある体験であったと考えられる。

さらに，光田・村上（2002）によると，初めて子を持つ父親は，育児経験の無さに由来する育児に対する不安や怖さを感じている。初めて父親になる者にとっては，子育てのハードルは高く，子育てに対して萎縮してしまいがちだと推測される。そのようなことを踏まえると，父親になる前の学生にとって，熱心に子育てをする父親だけでなく，自身も共に楽しみ，むしろ子どもらしく見えるくらいに楽しんで子育てをする父親のイメージを得たことは，子育てを堅苦しく捉えることなく，自己理解を深めていく契機として，積極的に子育てに参与していく大きな助けとなるのではないだろうか。父親である前に一人の人間としても，自己実現を果たしていくためのまたとない機会が子育てには内包されており，そこには義務や責任といった消極的な意味を超えた積極的・創造的な意味も存在すると考えられる。そのようなことを踏まえると，次世代の父親たちは，より積極的に子育てに取り組んでいけるようになると推測される。

2. 本研究の限界と今後の展望

最後に，本研究の限界と今後の展望について論じる。第一に，父親グループごとの差異については考慮できていない。学生の活動内容にはある程度の一貫性があったが，父親グループごとの規模や方針が異なっているため，学生の父親イメージの変容の仕方が異なる可能性がある。今後は父親グループの性質ごとの影響を比較検討する必要がある。第二に，本研究では性差について検討出来ていない。今回の分析で得られた概念は全て男女共に共通して具体例が抽出されたが，男性と女性とでは自身の父親やプロジェクトに参加した父親たちとの関わり方に違いがある可能性がある。そのため，より性差に着目したデータ収集・分析を進める必要がある。第三に，調査対象者の特性が分析結果に反映されていない。参加した大学院生は臨床心理学専攻であり，子育て支援への関心や内省力の高さが想定される。そのため本研究では質問紙形式で十分なデータが得られたが，他の調査対象者についてはデータ収集の方法を考慮する必要があると考えられる。さらに，大学院のカリキュラムの影響も受けて，父親イメージの変容が促進されたと考えられる。そのため，他専攻の学生では今回の調査対象者よりはイメージの変容が生じにくい可能性がある。そのため，今後は他専攻の学生が父親と関わることでの父親イメージの変容についての研究が望まれる。最後に，本研究で用いたM-GTAは仮説生成的な分析であり，得られた知見を実践活用する中で検証していく立場をとる。今後，次世代の父親（学生）が参加する父親支援グループでの実践活用の中での検証・修正が望まれる。

〈付記〉プロジェクトは2012年度トヨタ財団国内地域助成を受けたものである。プロジェクトを通して本研究にご協力いただきました，親と子のこころのエンパワメント研究所の馬見塚珠生先生，平安女学院大学短期大学部の清水里美先生，学校法人津嶋学園の矢本洋子先生を始めとする子どものしあわせプロジェクト実行委員のみなさまに深く感謝申し上げます。

引用文献

Armstrong, T. 1985，中川吉晴訳 『光を放つ子どもたち―トランスパーソナル発達心理学入門―』日本文教社 1986.
神庭純子・藤生君江・飯田澄美子 2005 「養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究（第１報）―家族機能との関連性について―」『家族看護研究』10，68-77頁.
金子省子 2015 「父親を対象とする子育て支援―父親向け活字情報の分析から―」『愛媛大学教育学部紀要』62，89-96頁.
柏木惠子・若松素子 1994 「「親となる」ことによる人格発達―生涯発達的視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』５，72-83頁.
柏木惠子 1998 「“父親である”こと，“父親となる”こと」柏木惠子編『父親の発達心理学―父性の現在とその周辺―』川島書店，309-359頁.
加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子 2002 「父親の育児かかわり及び母親の育児不安が３歳児の社会性に及ぼす影響―社会的背景の異なる２つのコホート比較から―」『発達心理学研究』13，30-41頁.
河合隼雄 1995 「子どもと教育」河合隼雄編『河合隼雄著作集第７巻』岩波書店.
木下康仁 2003 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い―』弘文堂.
木下康仁 2007 『ライブ講義M-GTA：実践的質的研究法―修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの全て―』弘文堂.
小林益江 2002 「妻の妊娠期からの父親準備―胎児画像・胎動とジェンダー特性から―」『母性衛生』43，274-282頁.
子どものしあわせプロジェクト実行委員会 2015 『子どものしあわせプロジェクト―未来に続く父親ペアレントメンター養成―事業報告書』親と子のこころのエンパワメント研究所.
国立社会保障・人口問題研究所 2008 「第４回全国家庭動向調査」.
小崎恭弘・田辺昌吾・松本しのぶ 2017 『家族・働き方・社会を変える父親への子育て支援―少子化対策の切り札―』ミネルヴァ書房.
光田咲子・村上明美 2002 「初めて子どもを持つ父親の育児観」『母性衛生』43，67-72頁.
三浦史進・原口喜充・小川将司・平野仁弥 2017 「大人の中にある「子ども性」の要素とその意義の検討―Jung派の文献を中心に―」『大阪大学教育学年報』22，43-52頁.
宮本知子・藤崎春代 2008 「日本における乳幼児期の子どもを持つ父親研究の動向」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』11，57-66頁.
野津山希・佐藤勢子・中浜千明・青野篤子 2011 「「男性の子育て」支援プログラムの実践的研究」『福山大学こころの健康相談室紀要』５，19-26頁.
大元千種 2010 「父親の育児参加とその支援について」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』５，187-196頁.
老松克博 2014 「人格系と発達系―〈対話〉の深層心理学―」『講談社』.
大阪学生チーム 2015 「活動を通しての学生のお父さんイメージの変化」子どものしあわせプロジェクト実行委員会編『未来につなぐパパの子育て支援のコツ―パパ活動実践報告―』親と子のこころのエンパワメント研究所，40頁.
大関信子・大井けい子・佐藤 愛 2014 「乳幼児を持つ母親と父親のメンタルヘルス―夫婦愛着と自尊感情との関連―」『女性心身医学』19，189-196頁.
Rubin, R. 1984，新道幸恵・後藤桂子訳 『母性論―母性の主観的体験―』医学書院 1997.
Samuels, A. 1985，小川捷之監訳 永井 撤・白石秀人・渡辺 弘・前川美行・岸 良範・安島智子・石川敬子・穂刈千恵・渡辺寛美・村尾泰弘訳 『父親―ユング心理学の視点から―』紀伊國屋書店 1987.
新道幸恵・和田サヨ子 1990 『母性の心理社会的側面と看護ケア』医学書院.
清水里美・馬見塚珠生・矢本洋子 2017 「子育て支援プロジェクトにおける父親グループの特徴と活動内容との

関連」『平安女学院大学研究年報』17，59-69頁.
Stern, D. N., Bruschweiler-Stern, N., & Freeland, A. 1998，北村婦美訳 『母親になるということ―新しい「私」の誕生―』太洋社　2012.
田中和江・橋本紀子　2007 「父親の育児とそれに対する支援の現状と課題―父親の労働状況と育児参加の実態から見る一考察―」『女子栄養大学紀要』38，53-74頁.
矢本洋子・清水里美・馬見塚珠生・平野仁弥・原口喜充・小川将司　2015 「父親への子育て支援プロジェクトの構想と展開(1)―支援した父親グループの特徴と活動内容との関連―」『日本心理臨床学会第34回秋季大会発表論文集』458頁.
安永　浩　1980 「「中心気質」という概念について」木村敏編『てんかんの人間学』東京大学出版会，21-75頁.

Change process of the image of the father in students through contact with men during child-rearing —The perspective of support for child-rearing by fathers before becoming fathers

HIRANO Kimiya, HARAGUCHI Hisami, & OGAWA Masashi

Abstract

The purpose of the present study was to examine how the image of the father in students changes through contact with men during child-rearing. We administered a questionnaire in the way of free writing. We analyzed the data using a modified grounded theory approach. The results illustrated the following process. The students' image of the father had formed in their childhood mainly based on their fathers; they then discovered and found new aspects of their fathers through contact with fathers during child-rearing. By uniting the original image of the father in childhood with the new image, they were able to reconstruct their image of the father. By "changing the image of the father", the students recalled their relationship with their fathers and imagined that they would be a father in the future, thereby furthering the "construct of the father model". The results indicated that changing the image of the father through our project played an important part in the preparation for being a father. Further, giving an opportunity for contacts with men during child-rearing to men before they became fathers was an effective support.